

日本生物學會誌

第 18 号



日本生物學會

1984年 5月15日

第 18 号

< も く じ >

澄 田 宏 : アナクシマンドロスの生物発生説 に関する若干の考察 (3)	613
奥 野 良 之 助 : 魚 陸に 上る (12)	631
<新聞記事から> : “割りばし” をめぐる 農林官僚と製造業者の論争	640
奥 野 良 之 助 : 「京大生慈学講座 在郷軍人会」始末記	643
編 集 者 へ の 手 紙 :	646
編 集 局 だ よ り	646
会 計 報 告 : 1983年4月 - 1984年3月	裏表紙

アナクシマンドロスの
生物発生説に関する若干の考察 (3)

澄 田 宏

総目次

- (1) はじめに
1 あてにならない2つの略伝
2 生物の発生に関するマンドロ発言の伝承
3 「湿ったもの」の取り扱い 以上 第13号
- (2) 4 タレスの水
5 相反対立物の発見 以上 第17号
- (3) 6 ト・アペイロン —— 無限定なものという限定
7 「正しさ」という必然 —— 現存する唯一の言葉
8 宇宙の形成に関するマンドロ発言の伝承
9 大地宇宙の形成

登場人物の略称

アナクシマンドロス	マンドロ	万泥子
ケンソリヌス	ケンソ	犬刷
ヒッポリュトス	ヒッポ	必掘人
アエテイウス	アエテ	会亭
テオプラストス	テオブラ	手降子
アリストテレス	テレス	途照子
シムプリキオス	シムプリ	身振記

6. ト・アペイロン —— 「無限定なもの」という限定

万有の多は一から直ちに生じたのではなく、相反対立する性質の物が互いに入り混り合っ
て起る変化を原因として生じた結果である、と万泥子は説明する。この説明は、水や火を物質的実体

として認識する過激な主張を相対化させ、一者を単純に物体視していくすう勢にくぎをさし、そこからの反論の余地を奪ってしまったにちがいない。そのために、彼は学問の進歩を遅らせた、後世の一部の唯物論者たちから非難を浴びることになる。しかし、これにはかれらの相当大きな誤解がある。ともあれ、この説明が、宇宙生成説の理論化に画期的であったことは疑いない。

もちろん、これによって提起された問題はさまざまだったであろう。とりわけ整然たる説明のために発明された相反対立物に注目は集まったであろう。相反対立物と呼ばれる対象は「常に2つから成る1つ」である。しかし、このものを、双数を本質とし、相対性を生命とするという側面に重点をおいて見るときは、それを1つと呼ぶことはできない。(しかし、それが1つとしては握られなければ、この側面は決して現われないのである。) すなわち、たとえ相反対立物によって自然現象の複雑さに統一的な説明を与えることができたとしても、それは、ある多を他の多によって始源からでなく、非原理によって叙述していることに外ならない。物語っているにすぎないのだ。そんな批評が集中したであろう。

たしかに、万泥子の説明は、多と一者との決定的隔絶の間に中間物としての「対」あるいは「双」という概念を介在させ、それによって両者に関係の橋を架け、相互連関の可能性を生ぜしめることになった。しかし、それは探究途上の問題であって、万泥子が向かうべき本来の課題は、始源の一者である自然原質は何かということではなかったか。ところが、この説明はその課題をたな上げしているばかりでなく 解決を困難にしているのではないか。

なるほど、万泥子が相反対立物を理論的に発明したことは、この始源たる一者の探究にはかえって大きな障害を置いたことになるのではないか、という疑いはもっともである。対立しているものを一致へと導いていくことは容易なことではないからである。しかし、これに対して私は次のように考えている。万泥子にとって重要なことは、複雑な現象(多)の解明にさいして次のような観点が必要である、ということだった。すなわち、「現象を正確に記述するには、具体的なものを比較して観察することだ。」

多を考える場合、具体的にはその始まりは2からであることをまず確認することが堅実なことであろう。しかし、その2はいかにして生じたか。それが生じるには1からより他にないのだと考えていくとすれば、その生成を見るには、2がどのようにして2であるのか、つまり2の様態を比較してみるのが着実な道であろう。その2は、同じであるか異なるか、そのどちらかではない。この同と異を成立させるものは「対立」の概念であろう。しかるに他方で、今度は逆に2がいかに多くの仲間からはずれて1に「対」で近づいていくとしても、それは1という比較を許さない数、すなわち一者の始源に合致することはないだろう。対立は一致が割れて始めて出てくるのであって、外から加わってくるものではない。割れて2が出てきた1以外のところに生成の原因を求めることはできないのである。

「相反対立物」の発見によって、万泥子は多の整合的説明には成功したのだが、始源の一者は

何かという根本の要求そのものは、決して答えられたのではなかった。むしろ、「相反対立物」という新たな概念の設定は、基本的問題の解決をやや困難にした形で先へと延伸したとも言えるかもしれない。しかし、それは探究の理論化のためにはやむをえなかった。

では、万泥子は一者である自然原質をいったいどのような方法で、どんな道を通して求めていったのか。すなわち、かれの探究の前提となる条件は何であったか。それを直接知ることはできないが、それがどのようなものであったかは、途照子の哲学史の記述から推定していくことはできる。それはすでに4節で参照した資料8の中にある、

存在するすべてのものがそれから成り立ち、最初に生成したのはそれからであり、最後はそれへと消滅していくところのもの。

という部分である。

万泥子によれば、混然としている万有の多はその組成が、乾：湿、熱：冷など相対的には極めて明瞭歴然である相反対立物によって記述される。しかし、この相反対立物が、上記の引用文に出てくる3つの「それ」のうち最初の「それ」に相当するとしても、第2、第3の「それ」に適合しなければ始源の資格はない。もし基本的な2対の要素の中からさらにより基本的な1対が確定されたとしても、今度は「対」のうちのいずれに、たとえば高熱の方が低温の方がいずれに一者の地位を与えるのか。しかし、これは到底不可能であろう。なぜなら、どちらも互いに他を待って存在するものであるからだ。

かくして万泥子は「(4つの要素のうちの)どれかある1つを基本とするのでなく、それらの外の別のもの」を想定するのがよいと考える(資料4)。しかし、相反対立物の主張の上に、かの前提命題を満足させるものを仮定するとなると、それは相反対立物を生成する可能性を具え、分離のすう勢を内部から制御して1つのものにしていく強力な結合力を内蔵するものでなければならぬ。文法的に言えば、相対的に明確に区別し限定されている2つのものが共有することができ、かつ帰属することができる1つのものを定義することである。そのようなものがどうやって可能であろうか。どうやってかは分らないが、マンドロはそれを発見し発明した。

どのような思考の過程がそこにあったか分らない。それをうかがう由もない。今となってはそれをたどっていく術もない。これについてわたしたちが知ることができるのは、先に示した資料7および4の身振記が伝える記述からである。それによれば、万泥子は、原理は「・・・要素と言われているもののどれでもなく、それらとは別の、ある無限の本質」であるとして、相反対立物を永久運動によって分離していくところの変動する一者、という自然原質の観念を発明した、といわれる。しかしながら、この引用はペリパス学派の用語による解説文であると言われる。

一方、テレス本人の記述の方は、「1つのものに含まれている相反対立する性質のものが、その1つのものから分離し出される」(資料6)とあるだけで、まことに簡単にそっけない。1の中

にこの「対」=2がどのように含まれていて、どのように分離し出されるのか。そういうわたしたちが最も知りたい肝心の情報については、1つも報告されていない。おそらく詳細はテレス自身も知ることはできなかったのであろう。

では、万泥子は始源の自然原質である一者をいったい何としたか。

そのとき、マンドロの思考がこれに与えたものは、「アペイロス」という否定的なことばであった。このギリシア語は、「境界がない」、「区切りがない」、「仕切りがない」という意味の形容詞である。これの中性単数形を名詞化して、自然原質は「ト・アペイロン」、英訳して「ジ・アンリミテッド」：「無限定なもの」と命名された、という。

これははたして命名というに値するのか。これには、名づけて「名無し」と呼ぶとか、称無名とか言う類の放逸さや諦観が感じられなくもない。自然原質を何に限定していくか、その探究の中で発語する「無限定なもの」という答えは、まるで答えになっていないように見えるし、あるいは、お手上げて答えはあきらめたか、それとも自暴自棄になって答えたようにも見られかねないからである。

しかし、そういう受け取り方は哲学的ではないのである。それが解答の断念放棄でもなく、答えていない答えでもないとするれば、それは問いを覆えしていく答えかもしれない。哲学において求められているのは、実にこういう類いの答えである。なぜなら、そういう答えがしばしば問題の所在を明らかにし、真実への一步を進めるものだからである。その答えのために問いが更新され、あるいは補正され、あるいは転換されねばならないことになる。哲学にとって重要なことは見物席に行儀よく座ることではなく、よく見るためには席も壊してはばからぬことである。哲学史——ここでは広く自然科学を含む学問史であるが——は、このようにして展開し、かつ、大きな振幅をもってかえってその帰すうするところをほのめかすのである。

したがって、この万泥子の答えがいかにも禅味にあふれたものと感心するのは自由であるとしても、アペイロンを命名した思考は、禅林の思索「放下」とはまるで異質であり、無縁であると思わなければならない。公案や見性によって得度悟道した境地ではない。それは、やや大げさに言えば、西洋最初の抽象的思考と論理が到達することができた一頂点である。というのも、この命名は、観察によって得られた経験的知識に基づく類比と推理とが、論理の断絶や飛躍を断乎拒否して、因果系列をどこまでも言葉によってたどり、自らを連続させていく中で行なわれているからである。

「無限定なもの」という答えは、自然原質を特定することの困難を、現象する地、水、火、風の4品や、知覚的実在としての相反対立性の4物以外の別のところで解決しないで、それらが総合統一される条件の中で解いていこうとしたときに、見出されたものであろう。その過程を明らかにしてくれるための適当な証言はないけれども、たとえば、途照子の一見報告内容に乏しいと思われた、先の資料6が意外にも重要なヒントになっている。

ト・アペイロンはどのような限界も限定も容れないものであるから、実体的に説明すれば、そ

れは無限に広がる空間を占めるものである。したがって、これから生み出される^とと言われる「相対立する性質をもつもの」は、ト・アペイロンの外に産出されるのではありえない。限界もな^く無限に広がって充ちているものの外側に分離することによって、生成が起こるのではないだろう。ト・アペイロンの外に、それらが形成し出されるための空間はなさそうである。相反対立物の^{存在}は、その母体とは逆に、相互の中間に「さかい」を主張し、「しきり」を意識し、「くぎり」を要求することに存在の特色をもつ。それは、相対的にではあるが、明確に識別できるものである。よって、もし、ト・アペイロンの外にそれらが形成されるとすれば、それに境界を与えることになってしまうからである。

さて、途照子の示すものによれば、1つのものに含まれているものが、その1つのものの内部に姿を現わす形で起こるといふ。つまり、内部にどんな区別も欠いていて、制限されることなく「物」性や「品」質を可能的に含んでいるものが、その内部にある変化が起きて、分離する形で1対の相反対立物を、あるいはそれを生む胚珠（ゴニモン）を、界面で限ることによって出現せしめる。すなわち、生成させることになる、と云うのである。ちょうど鏡もちが内部でひび割れたものの、外皮は固く閉ざされているために、すき間ができず界面だけができて区切られていくように、である。

外への放出である出産をもって生成とみなす慣行的思考に満足して、それに留まることをせず、生成の事実を真の根源である懐妊にさかのぼって認定することは、生成についての説明を精細なものにしつつ、また、より合理的なものにしていくことになるだろう。生成のモデルがはたしてそこにあったかどうかは分からないが、同質の中に異質のものが生まれてくる過程は、このモデルを使えばぴったりではないか。

同質のものから異なるものが生まれてくるのは、限定のない1つのものの内部に界面（ベラス）が生ずることにより、建物が間仕切られて部屋がつくられていくように、多に限定されて生じていく、と考えるのである。したがって、相反対立物が生まれる根源は、それとは全く反対の、界面という限定をもたない性格をもつもの、あるいは、同質であってどんな限定をも持たないものでなければならない。これがすなわち、ト・アペイロンである。

もちろん、このように自然原質を万泥子は言語宇宙のなか、すなわち、有限な論理の抽象世界の中で求めたのではないとする反論は可能である。自然原質の実体を感覚的空間ないし経験的世界に求めていけば、人は、宇宙に自在に広がる巨大な未分化の塊りを想定して、万泥子はそれを「無限定質」と呼んだのだ、と云うことは不可能ではないからである。そう見ていくことは常識的なことかもしれない。W. K. G. ガスリーが

「そのかたまりの中では、相反する諸要素ないし性質は、いわばその中に潜在的あるいは可能的な形で含まれるのであるが、まだ区別がない一つの完全な融合体なのである。」

（『ギリシアの哲学者たち』、理想社、40ページ）

と言うとき、この解釈には穏当な和やかさがあり、健全ささえ感じられるからである。しかし、その思想の健全さゆえに、限定を受けることを拒否して存在を主張する「無限定なもの」に到りついた、万泥子の理論的探究の自由で革新的な一面が見落されてはならないだろう。

相反対立物の存在は、それらが1つのもの、ト・アペイロンに留まっているかぎりでは、未分化の状態である。相反対立し合っている、1つに結合しているという事実によって打ち消し合っているのだから、その存在は外見できず、可能的にしか実在することはできない。ト・アペイロンとは、そういう深い内部事情のある実在である、ということだ。万泥子が、あらゆる存在と現象をそこから引き出すことができる積極的で肯定的なものとして考えた、この「可能的な実在性」の観念を表現することばに、否定的表現の消極的な語義をもつ「アペイロン」がふさわしいものとして選ばれた。それは たぶん、この語がもつ強い否定性が、万有の存在と現象の生成を永続的に同から異へ、異から同へと回帰させていく無限の源泉を性格づけていると、万泥子に思われたからではなからうか。

マンドロのコスモス形成理論の概要は以上で終る。

7. 「正しさ」という必然 —— 現存する唯一の言葉

相反対立物を知覚的実在の本質的要素と見ることによって、自然現象における多の生成と変化とをマンドロは説明しようとする。しかし、それ自体が多である相反対立物の生成出現を可能にするには、始源の一者であるピュシス（自然原質）が無限定なもの、説明上は無規定なものでなければならぬ。それを確認することが、「ト・アペイロン」の理論であった。

この限りでは、マンドロ宇宙生成説の理論構成のかなめとなるものは、ト・アペイロンよりも、相反対立物の方であろう。くり返し言うが、相反対立物を仮定することによって、万有の生成と変化および動がいかに合理的に解釈されるか、そして同時に、始源の一者から同ばかりでなく異が出てくることの必然性をいかに説明できるか、この2つが万泥子の研究主題であった。とりわけ、この後者の説明のために立てられた「ト・アペイロン」説は、かれの天才を発揮することになった。しかし、その抽象的な思考は、かれの鋭い知覚と経験的知識に養われ、支えられた直覚によっている。理論家の言説が真に冴えるのは、かれの現実認識の深さ以外にはないように、マンドロの天才的な抽象思考も、現前に生起する事実を離れるものではなかった。

相反対立物は、互に他を侵略しながらは権を争う。しかし、そのどれかが一時的に優勢となることはあるが、盛者は必衰であった。すなわち、侵略はやがて必ず報復を受けて、侵害は復旧され、均衡が回復する。しかし、この均衡は終点ではなく、過程であって、新たな相互侵略の前段にすぎないのである。

ここで、もし宇宙の現前の変化現象についてのマンドロ解釈を1つの観物として示すならば、次のようなことになるだろう。

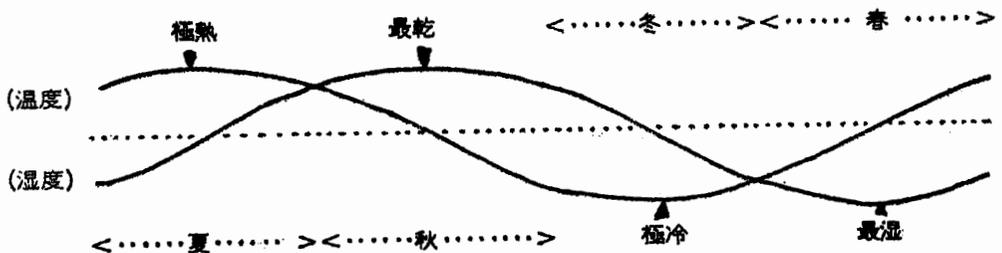
ドラマ（行為）が行なわれる宇宙空間という舞台がある。その空間の外には無限の広がりが続いているのだが、それは幕でさえぎることによって表わす。すなわち、幕でかくれた両そでと天井に、何があるか分からない。そこから何が起こってくるか判らない。無限に通じているからである。また、床面は空間を区切っているように見えるが、実際はいつ落ちでいぐが分がらない奈落で、一寸先が分からないやみである。分からないことほど想像とそれに疑惑をかき立てるものはない。そこからは何でも引き出せるからである。

その無限の十方世界から発生してくる彩色された煙霧が、この舞台の真中に宙づりにされている大地へ向かって吹きつけられてくる。そのガス体の主なものは、赤い「熱」と黒い「冷」、そして、白い「乾」と青い「湿」の2対4性である。これらの煙霧は互いに混入し合いながら、舞台の周囲から中心部へ動き始め、大地を動かぬ核にして渦巻流を作る。

この渦運動によって、4色の煙霧は、混合と分離を一定の間隔をおいてくり返す。

赤と黒の煙霧は、熱と冷という相反対立の関係にあるが、両者は同一のものから生じた、いわば盾の両面のように、性（質）的關係は互いに相対的であるものの、量的な存在としては常に変化して互いに反比例関係にある。相反対立物の顕著な特性は、変化や動の中で示されることになるが、それは、これらが変化相や動態という姿体をとって存在していることによっている。だから、赤熱した朱煙の優勢が頂点に達するころから、これまで劣勢だった冷暗な玄雲はようやく回復し始め、活発に動き出す。そして、やがて冷暗が支配権をにぎる。しかし、それも永続せず、ふたたび冷から熱へと優位は交替する。ちょうど行き過ぎが是正されるようにである。これが1サイクルで、分離と混合は方向を異にして都合2度起こる。

もう1対の相反対立する性質をもつもの、すなわち、乾燥した白煙と湿潤な青霧も、また同様のしかたで、その盛衰が1循環する。しかし、この周期は先の1対のそれとは約4半サイクルずれている。そのため、1循環のうちに2対4性のいずれか1つが、同一間隔で交互に優勢に分離してくることになる。



これに応じて舞台上では、青春・朱夏・白秋・玄冬が循環することになる。すなわち、地球的

な規模で言えば、たとえば、太陽の熱は乾いた風を起こし、これを大洋の水に吹きつけて蒸発を起こさせる。これは、「湿ったもの」「冷たいもの」の中に、「熱いもの」「乾いたもの」が侵入していくことであり、優勢になることである。しかし、やがてこのすう勢は逆転する。雨期となり大雨や豪雨が降って、燃えさかる乾いた季節は鎮められる、という塩梅にである。

これは要するに、世界の推移は一定の循環の過程にあるということ、季節の規則正しい交替がそれを如実に示している、というのである。

では、この循環という規則的運動ないし変化が、なぜ不断に継起するのか。恒久的な動と変化を起こさせ、それらを持続させる原因は何なのか。この問はマンドロ的宇宙を考える場合、不可欠と思われる重要な問題であろう。マンドロ理論の間接資料が伝えている、「動と変化」に関する語テイネー（渦動）とアポクリシス（分離）は、この循環という、もう1つ大規模な自然の物理的恒久運動ないし秩序を支持し、構成し、そのために働いていると思われるからである。

しかしながら、そのようなわれわれの興味にもかかわらず、この点について満足することができる答えはえられない。それどころか、そういう現代風な自然科学好みの期待を無惨に打ち破ってくれるようなことを、マンドロ自身は言い残しているのである。マンドロ自身の言葉は、まとまった一文では唯ひとつだけが残され、現代に伝えられているが、これがなんとその、期待を裏切るような叙述なのである。

それは、例の身振記が途照子の『自然学』注釈中に引用して記録した、手降り子の『自然学説』の伝承である。これは、資料の直後に接続する、次の証言の中にある。

資料12 シムプリキオス アリストテレス『自然学』注釈 24、17

存在しているものらにとって、生成がそこからきたところのもの、それへと、また消滅も起こって行く、「必然の定めに従って。なぜならば、このものらは、時の査定によって、互に侵した不正の罰を受け、不正の償いをなすゆえに。」このように、かれ（万泥子）はそれをやや詩句風の言葉で語っている。

万泥子には著作があったことが伝えられているが、そのものは現存しない。これはそれに含まれていたものであろうか。そうすると、著作の中でこれがどんな位置を占めていたのかが、気になるところである。引用者が「詩句風のことで語っている」と述べたのは、「必然の定めに従って」という句を受けて、その理由をマンドロが記述した後半の文節のことであろう。「罰」とか「不正の償い」とかの語句をアレゴリーとみなして批評しているからである。

これに対して、自然学的な前半の文節は、マンドロの思想を保存しているとしても、その語句については今日多くの疑問が出されている。すると、万泥子を伝える自身の真正な文章——と言

っても、かれが使った方言では書かれていないのだが——は、たったこれきりだ、ということになる。他には何もなく、断片語のうち、かれの用語だとされているものがわずかにあるだけである。ということは、この真正の言葉の扱い方いかんによって、万泥子を自然学者からぐう話作家へ移し替えてしまうこともできることになる。

だから、この断片は、とくに重要視される資料となる。しかし、同時にもしこれが過当に評価されるときは、マンドロ研究に困った問題をひき起こすことになることも心得ておかなければなるまい。

さて、これまでの研究成果によると、マンドロ自身の言葉からの引用は資料中の「・・・」で囲ったところとされ、これが近代のおおかたの学者の支持をえている。原典批判の議論はほとんど出尽しているにもかかわらず、結論できるだけのかぎが見つかったわけではない。態度の決定ということになると、好みを変えさせるだけの説得ができるかどうかの問題になってくる。しかし、そういう議論はいずれ稿を改めて存分に行なうことにして、ここではひとまず引用の範囲を現代の好みに従わせておくことにしよう。

話をもとにもどそう。この断片は、唯一の直接資料であるけれども、もしこの文に大きな比重をかけて万泥子の思想の全体像を推定し想像するとき、他の伝承や証言を台無しにしかねないほどの起爆剤になる、という話である。そもそも現象の生起する必然性を説明するのに「罰」とか「不正の償い」などという言葉が飛び出してくるのは、科学者の論調ではなく、人事を悟った賢者がする予言的口調ではないか。自然や宇宙を支配する秩序の原理を論じるのに、人間や社会の規範とされる道德の理法をもってするとはあきれたことである。万泥子を「科学的理論家」と呼ぶなんてとんでもないことだ、という具合にである。自然の原理と社会の理法を別の起原のものか、あるいは無関係と信じている現代人のほとんど、とりわけ現代風科学者の多くを、この断片は大いに失望させるものかもしれない。

しかし、この両者すなわち自然の原理と社会の理法は、遠く隔たる別のものであるどころか、本来直結しているものであり、常にそうであるべきものだと考えたのが、古代ギリシア人である。その人間中心主義である。かれらは、その固い信念と強情さをもって、両者の結合のためにあらゆる努力を払った。両者のいずれに視点がおかれるかで、ある学問探究が後世から哲学ないし形而上学と呼ばれたり、自然科学ないし物理学、あるいは倫理学と呼ばれたりするが、かれらにとっては重点がちがうだけで同じことだった。

ところが、この自然と道德の関係は、キリスト教が世俗権力と結合して、両者が自らの安定をのみ願うようになって以後は、必然と自由という抜き差しならぬ形において専ら取り扱われる問題となる。そして、さらにこの形でなければ自然と道德の関係を論じることが不可能であるかのような議論形式が編み出され、そのための専門的職業——哲学教師をはじめとする諸学者先生が体制内に置かれるようになってきた。こうなると、諸先生がたはその形式に縛られることに唯唯諾諾と

して安んじ、すがり、はては必死でこれを守ろうとさえする。かくて今日では、自然の原理と社会の理法を接合させて考えようという想像も勇氣も持てないほど、先生らはなえてしまっているのである。

イオニア自然哲学は、学問研究が健康であるための4つの要件である、1) 研究はヒマでするもの、2) アソビでするもの、3) 権力や財力と結ばない、4) 何でもウタグル、とくに先生(先んじて生きている者)をウタグル、という節度を守っていた。したがって、原理と理法を区別したり分離して論じないと、宗教上差し障りが起きるとか、政治上あるいは家政治上不都合が生じる、という考えは全く生まれなかった。

人間も死すべき生物であるヒトとして、等し並みに自然の一部でしかない。そういう自覚から学問を起こしたのだから、両者の間に区別を見るはずがない。宇宙と人間の両存在は連続して、全体をなして1つであるという確信によって、この時代の自然観は支えられているのである。その全体としての宇宙世界に一貫して存在する不変不動の不滅な何かがあるにちがいない、そう考えたところから、学問的探究が始められているのである。宇宙と人間とを問わず、それらの世界に起こるすべての現象には、究極的には同一の原因がある、また、その原因である原理によって、自然であろうと、人事であろうと、すべての異なる現象は統一的に執行され、裁定を受けるにちがいない。これが、イオニア自然哲学の、すなわち人間が最初に学問し始めるさいの信念、いわば科学の初心と言えるものであった。

このように見てくると、断片の荘重な序詩的文節と、これに先立つ、手降子によって要約されたイオニア自然哲学の基本的な命題文との間に、違和感はいささかも感じられず、両者はなめらかに接合していることが分かるだろう。そして、このことから、引用文前半の文節は、マンドロ自身のそれにおいてはやや「詩句めく言葉」による文章表現をとるけれども、意味と論理的な脈絡は、手降子によって提供されている形の内容通りであったろう、と考えられる。そして更に、この2文節を含む文脈は、たぶん万泥子のピュシス論の総論の一部をなすものであった、と私は、次の理由から推定することができる。

初期ギリシア哲学の自然観においては、万有は、宇宙も人間も整然とした秩序ある運行の中になければならぬ。そうでないものは何1つ存在することはできない。万有が現に存在している以上、過不足が必ず是正されるには、不変不動という、すべてに共通する絶対的な正しさを軸として永遠の循環の中に、万有が動いていなければならないのである。万泥子の序言は、まずそれを述べるものでなければならなかったろう。

プシューケーによって同根であるとされる(自然)宇宙と人間(社会)とを支配する唯一のものがある、という信念がある。それは、万泥子だけではなく、師のタレスや、万泥子に続くミレトスの自然哲学者アナクシメネスに共通の探究前提であった。この信念は、少なくとも万泥子の著作の読者たちにはたぶんよく知られていたはずの、イオニア自然哲学の大原則であった。大原則であ

るがゆえに、周知のものでも、その「正しさの秩序」が一度は述べられなければならぬその場所は、総論の中こそふさわしかっただろう、と考えられるからである。

8. 宇宙の形成に関するマンドロ発言の伝承

マンドロは、その著作の中で、自らのコスモス形成理論によって宇宙世界の生成過程を精細に説明しただろう。その概要はいく通りか伝えられている。この節ではそれを、資料4～12とこれに加えて、いちおう信用のおける証言者テオブラに拠ったという偽ブルタルコスヌの伝承によって見ていこう。

資料13 偽ブルタルコス 雑録 2

万泥子は言う、恒久的なものから「熱」と「冷」を生産できるもの（ゴニモン）が、宇宙の生成のさい分離して来て、このものから、炎の球体が、大地を囲む空気の外のふちに、樹幹の外周に樹皮ができていくように、できてきた。これが破裂して切れ、いくつかの環状をしたものの内に閉じ込められたとき、太陽と月と星辰ができ上がった。

無限の広がりをもつ未分化の原初の塊りは、自らの恒久運動によって、「熱と冷とを生産できるもの」をその内部に分離生成させる。これが宇宙形成の第一段階である。（627ページさし絵1図参照）最初に相対立する性質またはその実体のうちの「熱いもの」と「冷たいもの」が生産するというのは、熱力学者たちを感泣させることだろう。この塊り、すなわち「ト・アベイロン」は、テレス「自然学」203b 13の伝承によれば、「不滅にして非破壊だ」という。この「無限定なもの」の中に、他の学説師家によれば、無数の宇宙が生成し消滅する。しかし、それによって、この「無限定なもの」が消滅もしなければ、壊れることもないと言うのは、その部分について述べたのではなく、全体の質と量について言ったものであろうか。無数の宇宙は、まずゴニモンの形から生成を始めるが、それを産出するト・アベイロンは無尽蔵の供給源だと言うのである。ここで、熱力学の第1および第2法則の先駆を見い出すのは全く読者の自由である。

この伝承で特に注目されるのは、万泥子が万有の生成の最初に、直接1対の相対立質の分離があったと見ていないで、まずその1組の「熱いもの」と「冷たいもの」を生産する力をもつものを分離させたことである。この指摘にもし特別の意味があるとすれば、それは、この月経（ゴニモン）が、「熱」と「冷」との相互侵入作用によって起こる1種のエネルギー源であること、それは、たぶん宇宙生成の始動に必要な消費熱量の供給源となることを示しているように思われる点である。

「熱いもの」が大きな仕事的能力となりうるのは、その絶対的な高さである高温ではなく、相対的な高さによってである。すなわち、熱が冷と共在するときである。つまり、「熱いもの」が

大きな作用力を持ち、これを維持するには、他方で反対の「冷たいもの」が同等量に作り出されればよい。ここで、両者の供給機構ゴニモンを設定していくことは、真に非の打ちどころのない適切な措置である。

ところで、ゴニモンという語は、途照子が創設した散步舗道学派の愛用した用語だ、という主張があり、マンドロ自身の語であることが疑われている。ところが、この資料13の信頼性を主張する側は、偽ブルタルコスは少なくともこの記述に関するかぎり手降子に忠実だったとして、譲らない。そして、別のマンドロ証言者ヒッポによって、これが引用されていることを引いて、信用できると主張する。学者という生物は自説を擁護するためには身勝手になるだけでなく、相当に鉄面皮であることは、専門領域を問わないようである。証人の数が少ないからといって、万泥子が「ゴニモン！」と呼んだ可能性が全くなかったとは言い切れないではありませんか——これで十分ではなからうか。(カスリー『ギリシア哲学史』第1巻90ページ参照)。

こういう事情もあって、この語によって表象されるものがいったい何であったか、という問題にいつそう議論が集中してくることになる。しかし、結局はどんな結論を出すきめ手もないままに終わっている。提案のいくつかを紹介してみよう。

問題に正面から取り組んで、コンフォードは「卵」説を、ウラストスは「渦巻」説を立てている。これに対して、カークはただ側面から論評するだけである。すなわち、報告者の手降子は、「それ」が何であるかを原典資料に当たって十分調査することができなかったのも、判断を手控えるために「ゴニモン」の語を使用したのだとして、手降子の慎重さがこの用語採用の原因だと言うのだ。しかし、これは空虚なおしゃべりであろう。

次に、生成の第2段階は、ト・ゴニモンが「熱いもの」と「冷たいもの」とを、その内部で生産し、内側に分離放出する過程である。(2図参照)。ここで想像されることは、この分離の進行にともない、ゴニモンの胎内は熱冷両者の生産によって大きくなる温度差(熱質)と、規模を広げてきた熱量とによって、ますます仕事の潜在能力が高まってくることである。そして、両者がゴニモンの中に潜在できる限界にきたとき、これを破裂させ、宇宙に多様な生成と変化と動とを起こすために、外に現われてくる、ということである。これは資料に直接記述されていることではない。しかし、次の段階で、炎の球体が内部圧によって破裂して局面を交換させ、新環境を開くマンドロ的発想が、この場面には適用できないのだ、という理由を見つけることは難しいだろう。むしろ、省略の多い資料13の切り詰めた叙述は、反覆される類似の現象を割愛した結果とも受けとられる。

破裂によるにしろよらないにしろ、ゴニモンは、自らを材料にして「熱いもの」と「冷たいもの」を生産して、その役割が終わると消滅する。生産物が体内にできるとすれば、最後は「熱」と「冷」でいっぱい満たされ、外皮だけになって破裂するか、はく落するかであろう。(3図参照)

第3段階では、新たに別の相反対立物、すなわち「乾いたもの」と「湿ったもの」の1対2物が、ト・アペイロンから分離してくる。(4図参照)。この分離発生は、第2段階の末期にたぶん

(外皮)

起こっている。ゴニモンの界、ないしゴニモンの破裂と密接に関係している、と思われるのだが、残念ながらこの推測に関するどんな証言もない。

この1対の発生は、以後の変化と動に重要な影響をもたらしてくるだろう。なぜなら、「乾いたもの」と「湿ったもの」は、熱質や熱量の調整や転換に有効な作用をする性質があるからである。かくして、単純な動から複雑な動へと変わり、宇宙世界が現われる空間に対流が起こり、渦動が始まる。そして次に起こるのが、この2対の相反対立物の相互混入による変化である。(5図参照)。この変化は初めはグローバルな規模で起こるが、だんだんローカルなものになっていく。

この4物の動によって起きる変化が、知覚的に明りょうに区別される素材の塊としての4品、すなわち、火、空気、水、そして土の形成である。(6図参照)。

9. 大地宇宙の形成

宇宙生成の最後の段階は、われわれ人間が住む宇宙世界、いわゆる地球系天体の形成過程である。それを、先の資料13にアエテならびにヒッポの伝承資料を補いながら示すことにしよう。

基本的な4つの相反対立物の相互侵害または相互混入によって、基本素材である火、空気、水そして土の4品が現象してくる。そのうちの土は、他よりも重いためより内部へと引き寄せられて地となり、やがて大地(地球)を形成する。そして、これを核として、その外側をとり巻くように、周囲に水と空気の混合した霧が発生し、大地を覆う。次に、さらにその外側に、つまり最外周に外殻が生長してくる。それは殻といっても炎でできた球面表層である。この理解には、その当時の宇宙の断面を図解する7図が役立つだろう。

ここで注目すべきことは、この炎の球面表層のでき方を説明して、立木の幹の周りを樹皮(プロイオス)が取り巻くようにできてくる、と述べ、事柄になじまないたとえを用いている点である。このプロイオス(外皮)は資料1に出てきた語であり、ここでも奇異な印象を与えた用語であった。資料1と資料 との関連はいずれ検討されねばならない。

さて、この球面表層、すなわち地球宇宙の外皮は、やがて破裂し、その断片ははるか中空に吹き飛ばされる。そのさい、大地と炎の球面表層との間に充満していた空気霧と一緒に吹き飛ばされて、その表層の炎の断片を取り込み囲んで閉じ込めていく。そして、それは、いくつもの環状をした軌道輪管(チューブ)となって、大地の周囲に、大地の水平軸の周りに同心円上に配置された、という。(8図参照)。そして、これらの輪管が太陽と月と諸星辰の回る道であるという。

地球の姿形は、次の2証言によって示される。

資料14 偽アルタルコス 雑録 2

万泥子は、大地は、その形は円筒なのであって、その厚みは横幅(径)の3分の1で

ある、という。

資料15 ヒッポリュトス 全異教徒ばく論 1、6、3

その形は湾曲して、丸く、石の円柱（鼓筒）にはほぼ同じである。その水平面のうちの1つにわれわれは居り、他の者らはその反対側にいる。

そして、空中の大地がどこへも飛んで行かず、また落下して行かないのは、

資料16 ヒッポリュトス 全異教徒ばく論 1、6、3

大地は、何ものにも支えられることなく空中に架かっている。あらゆるもの（パンタ）から等しい距離にあるため、じっと止まっているのだ。

と、その理由を説明している。なぜ重い大地が空中に静止しているのか。その理由として、水や空気によって支えられているとか、そのほか物理的な何らかの力の作用を考えると、そういう感覚的なものを通じてする経験的類推の思考に万泥子はよろうとしない。どこからも等距離にある所は円の中心である。中心点がいずれかの方向に偏って動いて行くには、それなりに要因がなければならぬ。それをどうやって見つけることができるだろう。このような考えには、純粋な幾何学的洞察がもたらす調和均衡の観念が働いている。

ところで、この説は古代ギリシア人のすぐれた理論的思想を示す1例であるとして、現代の知識人たちが好んで引き合いに出す。しかし、かれらはマンドロ的思考の全容をどれだけ理解して、これを引用しているだろうか。万泥子のこの発想は、その思想の文脈の中でのみ意味をもつのである。しかし、かれらが話題にするのは、その発想の意外性でしかない。古代思想は古いがゆえに劣っていて弱く、現代思想は新しいがゆえにすぐれていて勝っている、という考えほど野蛮な偏見はない。しかし、この野蛮さは、寺田寅彦が1929年「ルクレチウスと科学」を発表して指摘した時から今日まで、ほとんど変わることなく多くの科学者たちを支配し続けている。こういう優越感からギリシア文化が断片的に取り扱われるかぎり、古代ギリシアは現代からいよいよ遠い。そして、科学は本道から外れていよいよ隔たるのだ。

この伝承の真偽はともかく、その発想の真意がどこにあったか、思想の文脈抜きにそれを知ることは容易でない。せっぱ詰って言った苦肉策かもしれない。ひょっとしたら、聞き手を煙に巻く茶目気たっぷりの冗談だったかもしれない。そう言うのは、後世にこの考えを下敷にしていると思われる話を思い出すからである。それは、14世紀のフランスのスコラ哲学者ジャン・ブリダンが、自由意志をもたない生物について述べる話の中にある。（スピノザ『エティカ』第2部「精神の本性の起原について」定理49の注解）。

その話では、二か所に置かれた等量の干草の束の、ちょうど中間点にいるロバは餓死することになる、と言うのである。ロバは、あたかもその両方の等しい引力のために、どちらをも選びかね、どちらへも進みかねて身動きができずに、ついに飢え死にするのだ。このブリダンの発想に万泥子ほどの神秘的なひらめきを感じることができるだろうか。たぶん、現実のロバはこの話の作者ほどには間抜けではなく、両方の干草をきれいに平けて立去ることだろう。

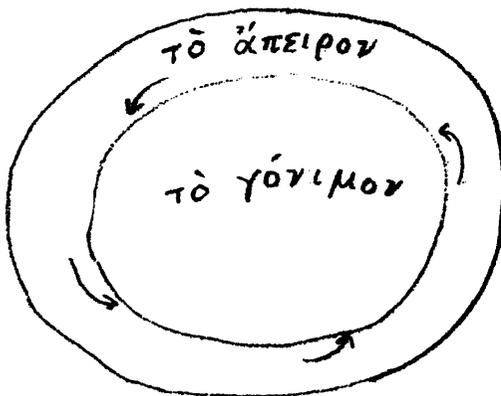
とにかく、このようにして、地球は天体の中心に配置され、これをめぐって太陽は燃え、月は偽りの光で輝き、諸星は軌道輪管の穴からまたたく光を発する。これが大地宇宙の動であり、秩序である。大地（地球）はこれをその外皮の破裂によって得たのである。破裂はもはや大地をもとの状態に戻えすことはない※。しかし、大地はそれによって自らを保持していくための環境を得たのである。それは、大地を中心として1つの宇宙が形成されたことである。

※ このように、万泥子の動や変化は、部分的に非可逆であるため、全体的には単純な循環の反覆にもかかわらず、始源回帰が避けられることになる。つまり、その動や変化は、らせん状に前進するのである。

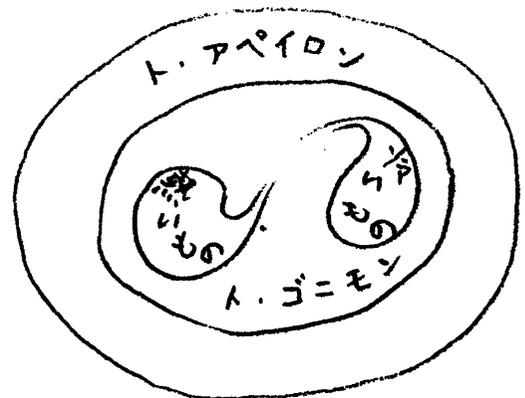
(未完)

さし 絵 説 明

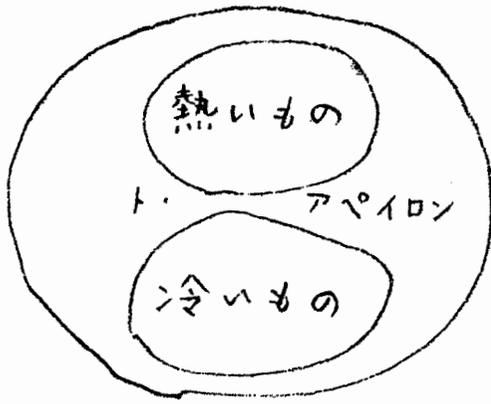
ご覧に供する絵図は、著者の論述力の不足をカバーしようという魂胆と、文字通り拙論を読まされて退屈し、中途で投げ出しうんざりしている読者への、著者のサービス精神がなした遊戯である。ところが描いてみたものの、絵図は表現つたなく 何ともお粗末で、イラストと言うのもおこがましく、ために再び駢文をもって説明しなければならぬ羽目と相なった。ああ、戯れに学問はすまじ。



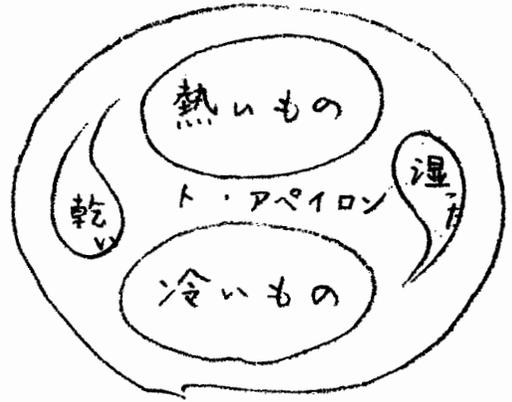
一 図



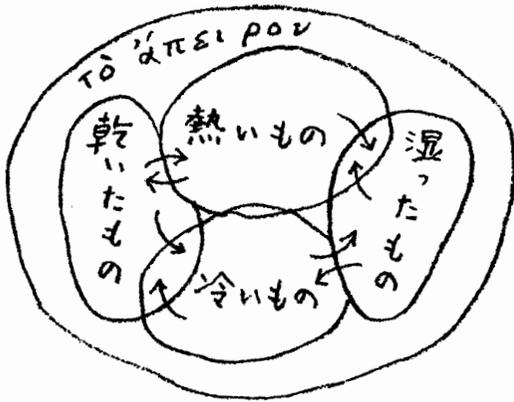
二 図



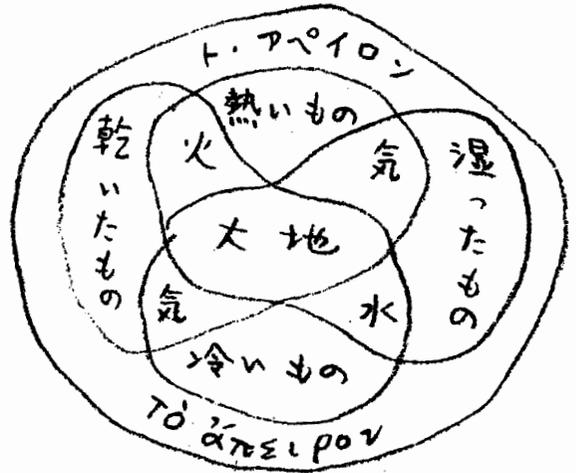
三図



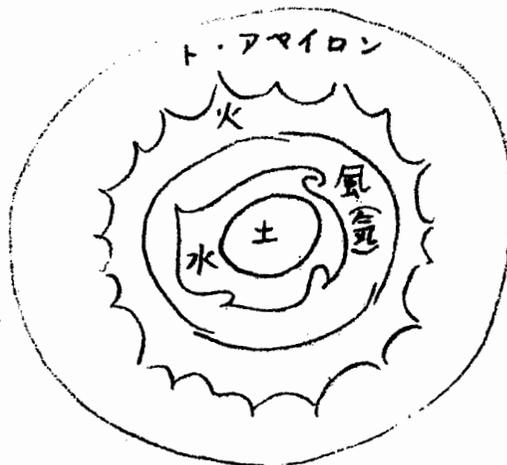
四図



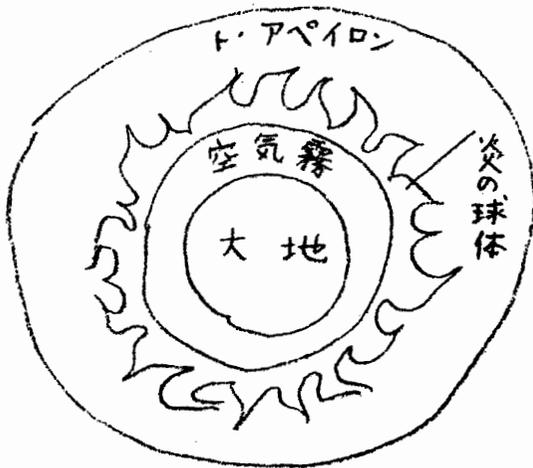
五図



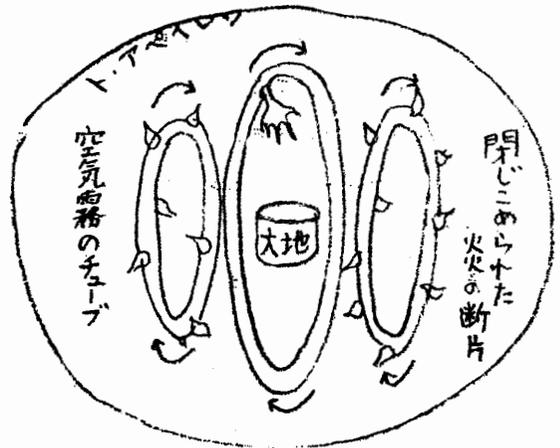
六図



六の補図



七図



八図

1図から6図までは、資料の読み方の1モデルを示しただけのものである。そこで、次のような説明が必要になる。

ト・アペイロン（無限定なもの）の内部に作られてくるト・ゴニモン（生殖力のあるもの）や「熱いもの」や「冷たいもの」等々の塊りは、図では1個ずつしか書かれていないが、実際は、いたるところに無数にできるのである、と万泥子は言う。そして、主としてこれら4物の相互混入、または相互侵害によって火、空気、水そして土の4品が、あちこちに出来るのだが、それらの実際の分布は、諸資料の示すところでは、だいたい一定の場所に定まっているようである。そして、それは比重の大きさにしたがって、土から成る大地を中心核として、その周囲に層をなして形成されている、と解される。（6の補図参照）。

6図は、宇宙形成時にも、形成後の変化運行にも、ともに適用できる参考図である。5図ででき上がった4物塊が、ここで相互侵入を始める。すなわち、5図で左右に対立していたジャガイモ型が、6図では洋ナシ型に、上下に対立していたジャガイモは、6図では甘夏カン型に、それぞれ互いに食い合って描かれている。2物1組で混入するところにそれぞれ1品ずつ生じ、合計3品2種でできる。著者の解釈では、これら火、気（熱風）、水、気（冷風）のほかにも、4物が混入し合うところに大地という土の1品が出来てくる。しかし、これを裏付ける確かな証言はない。

よって、6図は、5図までのものと異なり、各相反対立物間の関係と、4物の4品に対する関係を推定した解釈図である。

7図は、形成直前の原宇宙（ただし、地球系）とも言うべきものの断面図である。そして8図は、プロイオス（外皮）にたとえられた炎の球面表層が破裂したあとの宇宙の見取図である。

なお、1～8図までの外郭円は、ト・アペイロン、つまり無限の広がりを示すものである。限界がないものも、限界を与えることによって示すことが、場合によってはできるのである。——こういうことがヌケヌケと言えるのは永年教師をやった功德である。ああ、乞食と何やらは3日したらやめられぬ。

さて、それらの外郭円は、確かに自由意志によって円形のつもりで引いた曲線であるが、円状になっていないのにはわけがある。悲しいかな、このさし絵画家は、戦争中発育期を——どこかの国の首相のように発情期ではない——過ごしたハングリー世代に属するため、円を描けば、ことごとく蒸しパン状になってしまう。まことに、若きウエテルころの食物への執念と恨みは恐ろしいことを知らなければならない。それでも誠心誠意、1図は息をつめて一心不乱、一途に描いたが、これは失敗。2図目は「似たや成りたや まん丸に」の願いも空しく、これも似ず失敗。3図目はもうお手上げの参った図。4図目になってからは、もう言い訳はせずにおこう。

ところで、蒸しパンの方であるが、結局、われわれ少国民のところに回ってはこなかった。回ってくるべきものを横どりして食った連中が、その味が忘れられぬとみえ、いま軍備拡張とヤスクニ社の国営化をたくらんでいるやからだから、くれぐれも御用心。

<<生物学誇大事典>>

だいがく（大学）

“大きな学問”をする場所をいう。“中くらいの学問”は中学で、“小さな学問”は小学ですることになっている。人間は神さまでなく不完全な存在だから、いかなる学問にもウソが混入する。そのウソの部分が小さいのが小学、中くらいののが中学である。高等学校、略して高学というところもあって、ここでは“高望なウソ”のまじった学問が行なわれている。高学出身者を大学が選抜して入れるのであるが、その高度なウソが見抜けず、優秀な人をたいてい落してしまう。このままでは大きなウソもつけなくなりそうで、いまや“大学の危機”はせまりつつある。

魚 陸 に 上 る (12)

— 魚 から 人 間 ま で の 歴 史 —

奥野良之助

第 2 章 あらかじめ心得おくべき若干の知識 (続)

7 せきつい動物とは何か (続)

学生だったころの話である。我れらが恩師、森 主一助教授(当時)の「生態学実習」なるものを受講した。その1つに、鳥の声を聞く実習というのがあった。森先生が数人の学生、つまり我々を引率して大学を後にし、ケーブルカーで比叡山に登る。山道を歩くことしばし、とあるお寺の前の、うっそうと茂った杉林の下へくると、森先生は「ここで鳥の声を聞く」と宣言して、切り株の上にとっかと腰を下ろし、目をつむってめい想に入られた。しょうがないから我々も、あちこちに座ってじっとしていると、さまざまな鳥の鳴き声が増えてくる。ウグイスくらいは判るが、ちょっと複雑な鳴き声になると、さっぱりわからない。「あの鳥、マゴヤン、マゴヤンという鳴いとるなあ」と言ったのは、この学会のシンボルマークを描いた水原という男で、その鳴き声の意味を理解できる人は、まず10人といないだろう。1時間ほどたつと、森先生はぱっと目を見開いて、「聞いたか」という。わからなくとも聞いたことは事実だから、「聞きました」と答えたら、「ほんなら帰るか。」そのまま帰って実習はおしまいである。国立大学の正規の実習がこれでは怪しからん、と怒る人もいるかと思うが、不思議なことに、私はそれから鳥の声を聞くのが病みつきになって、卒業するまで比叡山の奥を走りまわることになった。何もかも教えこむのが教育ではない。もっとも、森先生がそこまで考えて、教えなかったのではないらしい。

森先生の名誉のためにつけ加えておくが、もっと真面目な実習もあった。栗林の下草の季節遷移を調査するというのがその1つで、春夏秋冬4回、1メートル四方の方形マクをおいて、その中の草および虫を全部つかまえて調べるといふ、はなはだ科学的な実習であった。春、我々は勇んでその実習を始めたが、その我々の中に1人、大物が混っていた。何をかくそう、日本の生物学界の大物、上野益三大先生の息子、俊一氏その入で、父親の薫到よろしく、中学生で数々の論文を書きすずに日本こん虫学界でその人ありと知られていた人物である。小さなこん虫をつかまえるのに、

吸虫管という道具がある。太いガラス管に細いガラス管をつないだだけのものだが、細い方を虫に近づけて吸うと面白いように虫は太いガラス管の中にくろがり込む。上野俊一氏は手なれた様子でわずかにメーデル四方のワクの中から、まるで手品のようにとっさりと虫をお縄にした。さて、夏の調査のとき、俊一氏はお休みであった。虫集めは我が友水原氏が担当した。彼は吸虫管を口にして、ワクのすぐ内側を歩いているクモをねらっている。一瞬、クモは宙を飛んでワクの外側へ落ちた。「こいつは外やからつかまえたらあかん。」つまり、彼は吸うべきところを吹いたのであった。実習発表会のとき、栗林の下の虫の季節遷移は、春数十種、夏3種となった。そのデータをつくづくながめた森先生、「これは季節遷移とは思えんなあ。」

トノサマガエルの食物連鎖なる実習もあった。よく晴れた午後、手網とホルマリン入りの大きなビンをもって、郊外の池へ出かける。そこにいるカエルを片端からつかまえて、ホルマリンのビンの中に放り込んで殺してしまうのである。100匹ばかりつかまえて学校に帰り、その胃袋の中の虫を調べるのである。熱に通わせ、予備校で苦勞し、大金を使い、親子共さんさん苦勞して入れた大学で、こんなことやらされるのだから、あまり無理をして行くようなところではない。

さて、トノサマガエルの胃袋の中からは、アリ・ハチ・ハエ・バッタ・ゴミムシ等々、ありとあらゆる虫どもが現われた。私には、それくらいの区別しかできなかつたが、それではいけないそうで、何としても種まで分けねばならぬ。そこへ登場したのが、先述の上野俊一氏である。彼は標本を全部もって帰り、2~3日すると1枚のリストをとどけてきた。そこには200近い種名が並んでいた。それが全部学名、つまりラテン語で書かれていたのである。当時、学名といえばカナダモのことをエロディア・デンサというといった程度しか知らなかつた——ちなみに、こんな変な学名をいまだに覚えているのは、我々が恩師宮地伝三郎教授の通称デンさんにひっかけて、「エロディア・デンサンいうたら、宮地さんの学名みたいやなあ」と水原があるとき、つぶやいたからである——私にとって、何のことやらわからない。仕様がなから、分厚い北隆館「日本こん虫図鑑」をひきながら、和名に直す作業にとりかかった。ところが、おどろいたことに、上野氏の書いた学名は、この分厚い「日本こん虫図鑑」に半分も出ていなかったのである。つまり、そこらにいるトノサマガエルが毎日食べている、そこらの虫の半分が、日本で出ている最大の図鑑に載っていないことになる。

私は、こん虫だけは研究しない、と、この時固く決心した。私のいる所は動物学教室である。動物はすべて「動物図鑑」に載っている。ところが、こん虫は「動物図鑑」に載っていない。こん虫は「日本こん虫図鑑」に載っているのである。したがって、こん虫はこん虫であって、動物ではなく、動物学教室で取り扱うべき対象ではない。ついでに言うと、「動物図鑑」に載っていない重要な動物がもう1つある。それは人間である。人間がなぜ載せられていないかについて深く考えたことがあったが、結論は、科学書である限り着物を着せて載せるわけにはいかず、さりとてヌードで載せては品位が落ちるからであろうということになった。人間も、もちろん、動物学の対象ではない。

こうして私は、こん虫と人間とを全動物界から追放したのだが、カエルを研究してもその餌はこん虫だから、逃れられない。地球上こん虫のいないところ、それは海である。そうだ、海へ行こう、というわけで、私は魚を研究することにしたのである。

ある夏、タイドプールの魚を採集して、その胃袋をあけてみた。何とそこから、ガガンボが出てきた。海岸近くの林から飛んで来てタイドプールに落ち、魚に食われたらしい。海岸はすでにこん虫に汚染されている。私が岸をはなれ、海に潜るようになったのはそれからのことである。

ずっと後、金沢大学生物学教室に来てみたら、諸般の事情から海へ調査に行けなくなってしまった。そこで、手近かにある旧金沢城本丸跡のヒキガエルを調べ始めた。ヒキガエルの餌もこん虫である。さてどうするか。これまで10年間に2000頭のヒキガエルを扱ってきたが、1頭も殺すことはなく、したがって胃袋をあけたことは1回もない。腹の中にこん虫をいっぱい詰めこんでいようと、外から見ている分には見えないからかまわない。「ところで、ヒキガエルは何を食べてるんですか？」などと、野暮な質問をする人も中にはいる。「ミスズなんか好きですね。ツルツルのみこんだりしてね。」たいてい顔をしかめて、それ以上聞かないから妙である。

ところで、我が金沢大学生物学教室には、こともあろうに、こん虫がはびこっている。動物関係の教官9人中6人までがこん虫である。こん虫の繁殖力は抜群だから、やむをえないといえばそれまでだが、動物に興味があってやって来た学生に、動物ではないこん虫をやれと強制するのは、サギの一種ではないかと思う。そこで、私は秘かに殺虫剤の研究を始めている。

ところで、いったい何が言いたいのか、私にもよくわからなくなってきたが、要するにこのこん虫に代表される無せきつい動物なるものは、まさに種々雑多であって、どうしようもないものだという事である。第一、バックボーンのない奴に、責任をもつわけにはいかない。だから、私はこの論文ではとり扱わないのだ、ということが言いたかったらしい。もっとも、そんなことは、「魚から人間までの歴史」と表題をつけたときに決まっていたはずなのだが、どうしてこんな話になってしまったのだろう。

さて、無せきつい動物は無責任だからとり扱わない、と言っに口の下から、こう言うことを言うのは気がひけるが、実は少しはとり扱わねばならないのである。すべて数字で割り切る近代生物学に背を向けて、「物事の起原と発展の歴史をさぐる」我が正当派生物学においては、せきつい動物の起原を考究しなければならぬ。その前にはこれしかいなかった、というはなはだ正当な理由により、せきつい動物の先祖は無せきつい動物である。その先祖だけはいやでもたしかめておかねばなるまい。詳しくは次章で述べるが、それが原索動物であることだけはここで書いておこう。

原索動物の代表は、ナメクジウオなる生きものである。ウオといっても魚ではない。サンショウウオが魚でなく、エラブウミヘビがヘビでなく、自衛隊が軍隊でないのと同じである。あるとき、水族館にいた私のところへ神戸税関の人がたずねてきた。警察ならともかく、外国へ行ったこともない私のところへ、はて何だろう。いつぞや、アフリカ航路の船の船長さんから、中に肺魚プロト

プテルスのはいった泥の塊をもらい、見つかっては面倒と車のトランクに入れて持ち出したことがあるが、あれがばれたかな。といっても、それなら検疫の方で税関じゃない。

ちなみにいうと、警察や税関が来たとき、すぐこういうことを考えるのは、おおむね、ふだんからあまり国家・社会の役に立つことをしていない人である。とはいえ、名指して来られたら、敵にうしろを見せるわけにもいかぬ。恐る恐る応対したら、税関の人は四角い氷の塊をひとつ持ってきていた。その中に、5センチばかりの細長い白っぽいものが閉じ込められている。

「これ、いったい何ですかね。食用として中国から輸入されたんですが、魚みたいでもあるし貝みたいでもあるし、何かわからなくて困ってますのや。」

これは我が「学識」を聞き伝えて教えを受けに来たのだとわかって安心し、早速氷をとかして1匹とり出してみた。それが実は、ナメクジウオだったのである。ひと目でそうとわかったが、そこですぐ「ああ、これはナメクジウオですよ」などと言ったら、まだ有識者の走りである私の言など、軽く見られて返って信用されない。こういう時は重々しく構えるのがよいのである。「ちょっとお待ち下さい」などと言って気を持たせ、いちばん立派な双眼実体顕微鏡などやうややく取り出し、しかめつらしい顔でのぞきこむ。ややあって、かるくうなづくとなるべく分厚い図鑑をばらばらめくり、「ああ、これですよ、ナメクジウオ」てなことたまうとよい。ついでにのぞかせて「どうです、この図と一緒にしょう」とやれば完璧である。

「よくわかりました。ところで、このナメクジウオというのは、やはりサカナなんですか」

「いや、サカナの先祖らしいと言われてはいるんですが、魚ではありません。」

「それじゃ、貝ですか。」

「貝とはちがいますねえ。貝ガラがないでしょう。」

「じゃあ、いったい何の仲間なんです、これは。」

つまりぬ権威者をよそおったばかりに、私は税関の役人相手に、せきつい動物と原索動物と軟体動物の関係について、一席講義せねばならぬハメにおち入った。

「ゆえに、したがって、ナメクジウオは、サカナでもなく貝でもないのです。」

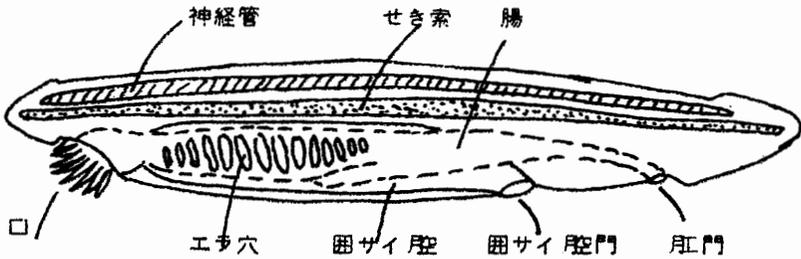
「エビともちがいますか。」

私はうんざりした。節足動物の説明もしなくてはならぬ。この調子だと、全動物界の系統分類まで発展して行きそうである。遂に降参してわけを聞いてみると、食料品の税率は、サカナなら何%、カイなら何%と、分類グループ別に決まっているのだそうである。ところが、原索動物なんてものの税率は決めてない。ナメクジウオの税率をどのくらいにしたらいいかという問題であった。

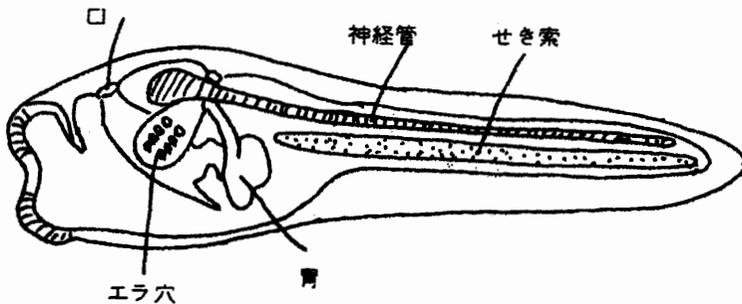
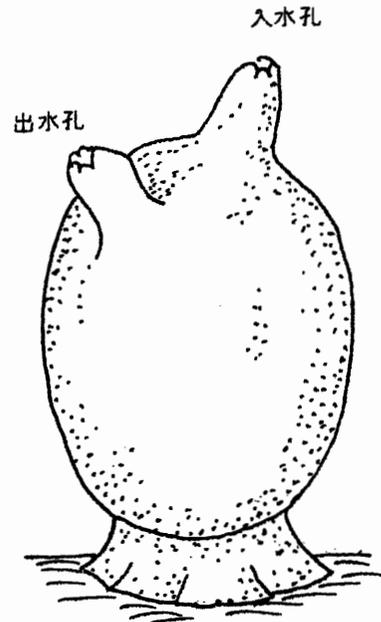
「まあ、貝やエビよりは魚に近いものですよ。あとはそちらでお決め下さい」ということでお帰りを願った。税率がどうなったかは知らない。でも、中国ではナメクジウオを食べていることは初めて知った。うまいとは思えないが。

というわけで、ナメクジウオとはこんな生き物である。といっても、これでは何もわからぬと

思うが、いずれまたゆっくり説明する予定だから、わからなくともかまわない。ともかく、次の図を見れば、ナメクジウオがいかに魚の先祖としてぴったりした動物であるかということは、一目でわかるであろう。



一目でわからないのが、ホヤである。魚の先祖はおろか、動物とも思えない。岩の上に根を下ろしていて、動けないからである。ただ植物とちがうところは、穴が2つあいていて、1つの穴、入水孔、から水を吸いこみ、もう1つの穴、出水孔、から出していることである。この中に、エラ兼用のふるいがあって、プランクトンをこしわけて食べる。そのほかの動きといえば、たまに収縮してちぢむ程度で、見てもちっとも面白くない動物である。あまり知られてはいないが、ナメクジウオとちがって大変たくさんいる動物で、大きいのも小さいのも、赤いのも透明なのもいろいろいる。東北地方では養殖までして食べている。私はまだ食べたことはない。した



がって味は知らない。こんな変な生き物を、我々の先祖とはあまり考えたくはないが、実はこのホヤは子供のころ、大きな頭に尻尾を生やした、オタマジャクシみたいなかっこうをしているのである。我々の先祖はナメクジウオではなく、このホヤのオタマジャクシなのだ、という人がいて、その人の書いた本のある事情の下に読まざるをえなくなり、私にしては珍しく最後まで読破したのでそのことは次章であらためてゆっくり説き明かすことといたそう。

ともかく、せきつい動物にいちばん近い親類は、ナメクジウオとホヤと少しの他のものを含んだ原索動物ということである。そこでこのころでは、せきつい動物と原索動物とを同じグループにすることが流行っている。すなわち、

せき索動物門	Chordata
原索動物亜門	Protochordata
せきつい動物亜門	Vertebrata

しかし、私はあくまで両者を別の門、つまり原索動物門・せきつい動物門の2つに分けることを主張する。同じ門にされたらホヤの勉強までせんならんし、この連載の副題も、「ナメクジウオから人間までの歴史」と改題しなければならぬことになるではないか。

さて、せきつい動物には、魚類・両生類・は虫類・鳥類・ほ乳類の5つのグループがあることになっている。常識的にはこれよろしいし、私も面倒臭いときはこれですますことにしている。しかし、学問とは進歩するにつれて物事を複雑にするものであって、最近はもっと増えている。といっても、両生類以下の陸生ものは相変わらず4つで、増えたのはみんな魚である。まず、ふつうの魚とサメやエイとは大いに異なっているから、これらを硬骨魚類と軟骨魚類の2つに分けようということになった。次に、世界にわずか50種くらいしかいないのだが、ヤツメウナギとメクラウナギ、合わせて円口類というのも、ずいぶん変な魚であって、別にしなければならなくなった。その上、大昔にいて絶滅した甲皮魚類という魚が、この円口類の仲間であると判定され、合わせて無がく類となった。この両者、実はアゴがないのである。さらに、化石にしか出てこない奇怪な魚の一群があって、これも板皮魚類として別になった。かくて、これまで魚として一括されていたものが4つに分かれてしまった。せきつい動物は、だから、次の8綱となる。

無がく綱	Agnatha
板皮魚綱	Placodermi
軟骨魚綱	Chondrichthyes
硬骨魚綱	Osteichthyes
両生綱	Amphibia
は虫綱	Reptilia

鳥	綱	Aves
ほ乳	綱	Mammalia

それぞれ、簡単に説明しておこう。

無がく綱

今を去る4～5億年前に現われた、化石に残る初めてのせきつい動物は、頭に甲をかぶっていたくせにアゴがなかった。つまり、せきつい動物はいきなり甲をかぶって出現したのである。なぜこんなものをつけて生まれたかについては、いろいろと面白い話があるが、それは後の楽しみにとおこう。この甲皮魚類のはるかな子孫が円口類だといわれるのだが、その理由は両者ともアゴがないというだけのことであって、両者をつなぐ化石は何も出ていない。だから、この2つはちがうという説も当然成り立つし、実際そう主張している学者もあるが、そうなると、甲皮魚綱と円口綱とを分けねばならず、綱の数が増えるから、その説はとらない。

板皮魚綱

少し考えてみるとよくわかるが、アゴがなければやはり不便である。そこで、古代の甲皮魚の中に、アゴをつくった魚が出てきた。それを板皮魚類という。何しろ前例なしにアゴをつくったものだから、何とも珍妙なものになってしまった。我々のアゴは下アゴだけが動くのだけど、板皮魚類の中には上アゴも上へ動くものもある。もっともその方が口を大きく開くことができるから便利はよい。初めてアゴをつくった板皮魚は、そのおかげで大きくなり、中には10メートルに達したものさえいる。現生最大の魚はジンベイサメの20メートル足らずだから、古代としてはまさに怪物であって、「恐魚」とも呼ばれている。ところが、彼らはアゴをつくり巨大にはなったが、体全体のつくりをスマートにしそこねた。人間ならスマートでなくたってちゃんと生きていけるが、水中の魚ではそうはいかない。板皮魚のほとんどすべては泳ぎが下手で、よたよたと泳いでいた。別に見たわけではないけれど、それで、体をスマートにつくり変えた魚に滅されてしまう。だから、現在板皮魚はひとつも残っていない。せきつい動物中唯一絶滅した綱である。

軟骨魚綱

体をスマートにし、セビレ、オビレ、シリビレ、ムナビレ、ハラビレの5つのひれを完成した魚の第1のグループが軟骨魚綱、つまりサメとエイである。サメは、3億年以上前に現われ、現在までほとんど形を変えずに残ってきている。エイは、だれがみてもサメとはちがうが、科学者たるものは外見にだまされてはならず、その本質を見ぬかねばならない。いかなる美女も一皮めくればドクロとなる。ドクロにしてしまえばだれでも大した差はない。もっとも、頭骨から生前の顔を復元する専門家に言わせると、やはり美女の頭骨というものがあるそうだが、それはともかく、サメを上下に押しつぶし、尻尾をムチ状にすればエイができ上る。軟骨魚綱にはもう1つ、ギンサ

メ類というのがいて、これはまた相当ちがうから別の綱にしなければならぬという説も有力だが、深海に住み滅多に人の目にふれることもない魚だから、この際不問に付しておこう。

硬骨魚綱

体をスマートにした第2のグループが、カツオやタイやイワシなど、ふつうの魚の硬骨魚綱である。この中には、タツノオトシゴやアンコウなども含まれるから、みんながみんなスマートになったわけではない。生物、とくに魚を相手にする場合、こまかなことにこだわっていると出世はおぼつかない。我が恩師の1人、波部忠重先生は、「船に乗って海の生物を調べる奴は、誤差10割に耐えられる神経を持って」と宣言された。私は、その基準に合格したとみえて、あちこち調査によく連れていってもらったが、よく考えると、誤差10割といえれば何にもわからんということになる。ともかく硬骨魚綱はありとあらゆる水域に入りこみ、その種数2万と数の多さを誇っている。この硬骨魚綱にも、先祖を異にする2つのグループがあるのではないかとされている。私の知る限りそういうことを言っているのは世界にただ1人であり、その1人というのが私だから、あまり信用しない方がよい。いずれ説明することにして、ここでは1つの綱にしておこう。

両生綱

硬骨魚綱のあるものが、陸に上って両生綱が生まれた。しかし、初めて上ったものだから勝手がわからず、水辺からはなれることはできなかった。とくに、卵に殻をつけるのを忘れたために、繁殖の度ごとに水中へもどらねばならなかった。それでも、初めて陸に上ったものだから、敵もおらず競争者もいなかったので大いに威張っていた。やがては虫類が力をつけて、壇の浦の平家よろしく追い落される。イモリとカエルは、だがら、平家の落ち武者のように、あまり表に出ることなくひっそりと暮している。

は虫綱

両生類のあるものが、水なしでかえる卵、羊膜卵を發明して、は虫類となる。羊膜卵などと言えは何となく有難く聞こえるが、毎日食べてるニワトリの卵が典型的な羊膜卵である。要するに、発生中の胚を羊膜という膜でつつんでその中に水をため、乾かぬようにしたただの話である。もっとも、この卵を發明したおかげで、は虫類はその後大発展して「恐龍時代」をつくるのだから、ニワトリの卵を食べる時、もう少し尊敬の念をもたなければならぬ。この恐龍もしかし、中生代の終りには、その大きさにふさわしく壮大に滅亡し、いまに残るトカゲやヘビやワニやカメは、その生き残りである。カエルやイモリとちがって、ワニなどは生き残りにしては威張っているが。

鳥綱

は虫類の中にも、前足と体の間に膜を張って空を飛んだ翼龍がいた。この翼龍は、しかし、種々の理由で空を飛べたはずがないとする説もある。その理由はいちいちもっともで、私も飛べなかったのではないかと考えている。でも、そうなると、なぜそんな化石がたぐさん出てくるのかわ

からない。後世の学者を困らせるために神様がいたずらしたのだ、という説に、私はいまのところ傾いている。ところで、やはりは虫類から出て空を飛ぶのに成功したのが鳥であり、その成功の秘密は、軽くて翼面積を大きくできる羽毛を発明したからだということになっている。鳥はすべて羽毛を持つ。というよりも、羽毛を持つものを鳥と言おうと決めたのである。

ほ 乳 綱

鳥とは別に、は虫類から出てきたものがほ乳綱である。体温を一定に保つ恒温性、おなかの中で子供を育てる胎生、生まれてしばらく乳で育てるほ乳を獲得して、ほ乳類は最高のせきつい動物となった。恒温・胎生・ほ乳が、いかに脳を発達させたか、という、またしても長い長い話があるのだが、それは次回のおたのしみにとっておこう。

<<生物学誇大事典>>

えいご (英語)

イギリス人、アメリカ人など、主としてアングロサクソン民族の使用している言語。何を感違いたのか、最近日本では、英語で読み・書き・話すことが、科学者の最も重要な資格であると思われるようになり、目の色変えてその修得につとめるようになった。英語で論文を書き、外人としゃべる人こそ真の科学者であるというわけである。日本人が英語を修得するには大変な時間がかかるし、時間をかけても外人並みにはなれない。人の持ち時間に限りがある以上、他の勉強に使う時間はそれだけ減っていることとなる。こうして頭の中身は貧弱となり、日本語の表現もつたなくなっていく。しかし、それらは科学者としての地位に何の支障ともならない。何となれば、英語でさえ書いておけば、ほとんどだれにも読まれないから内容が問題にされることはなく、また、日本の新聞・雑誌社には、ライターつまり“書き直し屋”という専門職がいて、どうにもならぬ原稿でも、ちゃんと読めるようにしてくれるからである。

<< 新聞記事から >>

“割りばし”をめぐる 農林官僚と製造業者の論争

1984年3月30日付「朝日新聞」に、「割りばしは資源浪費ではない —— 木っ端を生かした大事な林産品」と題する、農林水産省林野庁林産課長・三沢 毅 氏の“投稿”が掲載された。(次ページ参照)。要旨は次のとおりである。

「全国緑化強調期間がはじまって緑保護論がさかんだが、中には“割りばし論”のたぐいがある、疑問を感じる。割りばしの使い捨ては決して森林資源の浪費ではない。割りばしの多くは国産材の、しかも製材所の残材や風倒木などを利用してつくられている。魚で言えば、“サシミ”ではなく“アラ”の部分を利用しているのであって、森林資源の浪費ではなく有効利用であることを知っていただきたい。」

真新しい割りばしをパチンと割ってウドンをすすするのは、庶民のささやかな楽しみである。それが自然保護と矛盾しないと、林産の責任者・三沢課長が保証してくれたのだから、これはまことに結構な話である、と私は思った。

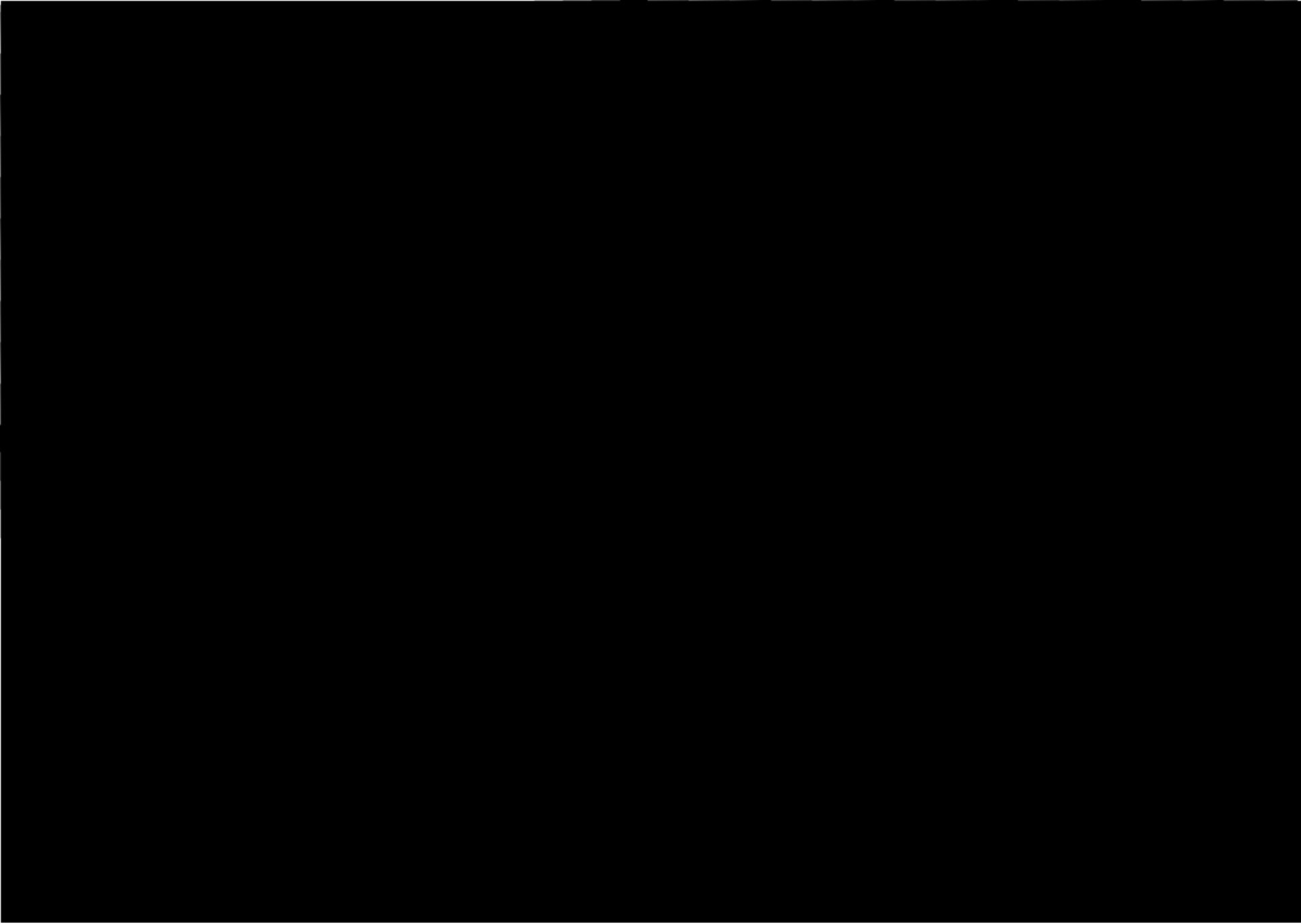
8日の後、4月7日の同じ朝日新聞の“声欄”に、倉敷市の会社社長・横溝氏の、「割りばしは丸太で作る」が出た。(次ページ参照)。これは、三沢課長に対する真向からの反論である。しかも横溝氏は、当の割りばしを製造販売している会社の経営者なのである。横溝氏は言う。

「林野庁の三沢林産課長が“割りばしは資源浪費ではない”と述べているが、これは事実と違います。」「高級割りばしは、生産量の1%程度ですが、これは手づくりで吉野杉を使っています。しかも、建築材以上の証目(まさめ)です。残る99%は機械製造ですが、製材所の製材過程で出る小片(木っ端)ではありません。私の知る限り、直径25センチ以上の松材のほかソ連やカナダから輸入したシラカバなどを使っています。」

さて、どちらの言うことが本当か？ 軍配は横溝氏に上げずばなるまい。人間、ウソをつくときは、自己に有利なようにつくものである。横溝氏は、自己に不利になることを堂々と主張している。三沢課長の方は、“割りばし”を例にとりながら、すべての緑保護の要求を“割りばし論”的だとすりかえようとする態度が、みえみえである。その主張がウソである証拠に、横溝氏の投書以来すでに2週間経っているが、一向に反論が載らない。

横溝氏は、せっかく三沢課長が割りばし業者を保護しようとしてウソまでついてくれたのに、あえて反論したのだろうか？

横溝氏はおしまいどころに、こう書いている。



「はしは日本人の食生活に欠かせないもので、衛生上からも清潔でなければならず、おのずと材料も選ばねばなりません。このため、製造業者は大変苦勞するわけです。一年間に使う割りばしの量は木材にして約17万立方メートルで、日本の木材総需要量の約0.2%ということです。しかし、よい材料を選びますので、資源浪費につながっているのではないかと心配し、資源保護と需要の板ばさみになっています。」

これこそ、製造業者の「良心」というものだろう。こういう人が割りばしを作ってくれている限り、少なくとも割りばしによって森林資源が荒廃することはない。ろくに読まれもしない論文の大量生産をしている学者——最近私もその仲間入りをしてしまった！——が批判する余地はない。

それにしても、横溝氏に対する三沢課長の反論、あるいは弁解、を是非聞いてみたいものである。それを出すことは、「大朝日」の責任でもあろう。

(野 良)

<<生物学辞大辞典>>

けんきゅうひ (研究費)

もともとは、研究のために必要とされる経費のことであった。現在は、研究費を使うことを研究というようになった。たとえば、カタツムリの行動を3時間、じっと観察しているだけでは研究と見なされない。研究費が要らないからである。そこで、ビデオ撮影、再生装置一式を購入し、カタツムリの行動を3時間のテープにおさめ、実験室で再生して観察することになったのである。研究とは、かくの如く、金と時間を食うものなのである。(→研究者)

けんきゅうしゃ (研究者)

研究する人のことを研究者といったのは、すでに過去のことであって、現代では、研究費を使う仕事に従事する人のことを研究者というようになった。内容はともかく、多くの研究費を使った研究ほど、価値が高いのである。そこで、研究者は、研究するヒマを惜しんで研究費集めにせいを出すようになった。(→研究費)

奥野良之助

ある日のこと、といってもいつごろだったかわからぬほど古いある日だが、友人水原洋城氏がふらりと私のところへ現われた。彼は私と大学の同級生であり、京都大学を1、2を争って卒業した仲である。私たちの学年は2人だけだったから、1、2を争わざるを得なかったのではあるが。彼の頭と口の回転の速さは、私ごときの比ではない。後日の話だが、私が金沢へ来て間もなく、彼が私をたずねてやってきたことがある。奥野先生の親友来るというわけで、金沢の院生・学生どもが一席設けた。その席上彼は、始めから終りまでしゃべり続けたのである。学生いわく、「まだ奥野先生でよかった。水原先生でなくて。」以後、私の株は大いに上がったのである。

その水原氏が言う。

「この間、久しぶりに京都の生態学談話会に出たんや。」ちなみに“生態学談話会”とは、生態講座のゼミみたいなものだが、大体学生が主催していた。私と水原氏とが係をやったとき、それまで“生態系談話会”といていたのを、勝手に“生態学談話会”に変えてしまった。理由は、「生態系なんて、ほんまはあれへんやんけ」ということである。日本で初めて、「生態学とは生態系の構造と機能を研究する科学である」という定義をかかけて、「動物の生態」（岩波全書）なる本を書いた、講座主任宮地伝三郎教授と森 主一助教授とは、大いに不満であったらしいが、私たちには何も言われなかったので、そのままになった。「ほたところがああ、どうにもならんのや。困ったことやで。」

「何がどうにもならんのや。」

「こともあろうに、森サンが談話会で威張ってな。」

「ほんまか。そら困ったことやな。」

ことわっておくが、森サンとは生態講座の助教授森 主一氏のことである。

「そやけど、あの森サンに威張らせておくとは、学生はいったい何してんのや。」

「我々が出てから、学生もアカンようになったようやで。」

それから間もなく、私は神戸からはるばる京都まで出向いて、生態談話会をのぞいてみた。あの院生が論文紹介をしていた。何でも、山羊がメエーと鳴く、とかいう論文で、もちろんほかにも

いろいろあったのだが、それだけしか覚えていない。その院生は、我々のころの伝統にならい、その論文を批判的に紹介していた。私たちがいたころは、徳田御穂とか渋谷寿夫とか小野喜三郎とかいう、一言言い間違えると、まず3時間くらいの説教は覚悟しなければならぬ恐しい先生方がいてただ単に論文を紹介しただけではけいべつされるだけであった。「批判せずに、なんぼ論文読んでもしゃあないで。」

さて、その院生が紹介を終ると、とたんに森先生がすっと立上って発言した。

「〇〇君、君は、これこれという論文読みましたか。」

「いや、まだ読んでません。」

「その論文も読まずに、こんな批判するのは、ちょっと行き過ぎやと思うがなあ。」

少し解説しておくが、これは大学教官が学生をへこます、ほとんど唯一の手段である。すでにみずみずしい発想を生み出す柔軟な頭脳を失なった教官にとって、たまりはそれまでのためこんだ知識だけ。「こんなことも知らんで、えらそうなことを言うな。」私もちょいちょい試してみたが、若い人にはたしかによく効く。その院生も、「はあ、すみません」とあやまってしまった。

とはいえ、私たちのいたころとのあまりのちがいに、私はびっくりしてしまった。「その論文に何が書いてあるか知りませんが、ぼくはこう思うからそう言ってるんです。ぼくの言うことがまちがってるんなら、先生はどう思うんですか。それを言って下さい。他人の論文なんかひき合いに出さんと。」たいてい、自分の考えはないのだから、これで大体片がつく。もし教官自身の考えで反論してきたら、それをまた批判すればよいのである。

私はさっそく水原氏のもとを訪れた。

「君の言うとおりに、どうにもならんようになってるな。」

「そうやろ。何とかせなあかん。」

私たちは2人とも、すでに京大を離れていて現役ではない。しかし、その現役がたよりないから、我々“在郷軍人”がしっかりしなければならぬ。在郷軍人というのは、昔、兵役を終えて一般人にもどった人でも、いざという時に備えて、いつでも現役にもどれるようにするために、つくられていた組織である。そこで私たちは、「京大生態学講座・在郷軍人会」を組織することにした。言い出したのは水原氏だから、彼が会長となり、私は珍しく副会長におさまった。会則を決めようとしたが、少しきびしくすると、会長か副会長かどちらか、多くはどちらかひっかかることになり、とうとう次の2ヶ条のみとなった。

第1条 この会はあらゆる手段を構じて、京大生態学講座を破滅から救うこと。

第2条 会員は、他の会員から要請のあった時、その内容のいかんを問わず、即時かつ無条件に遂行すること。

この会の活動の記録は、公式には一切残っていない。当時私は神戸で魚に食わせてもらっていたし、水原氏は大分・高崎山でサルに養われていて、2人共結構忙しかったからである。しかし、

我々2人が「在郷軍人会」を結成したということは、電撃のごとく現役の院生・学生に伝わった。という聞えがよいが、実は我々2人があちこちで言いふらして回ったからである。彼らは、結構恐怖におびえたいらしい。ある院生は、「あいつら“在郷軍人会”なんて言ってるけど、あれは“O A S”にちがいない」と言ったとかいう。O A Sとは、そのころ、アフリカのフランス植民地アルジェリアにおいて、独立運動におびえてフランス人入植者がつくった、悪名高い反革命テロ結社のことである。

この話は、またたちまち我々の方に伝わってきた。

「おい、奴等は我々をO A Sや言うとするぞ。」

「見抜かれてはやむを得ん。テロでもやるか。」

「さしあたり、宮地さんのイスに、チュウインガム爆弾をはりつけるというのはどうや。」

O A Sが愛用したテロの武器は、どんなところへでもはりつけることのできるプラスチック爆弾であった。チュウインガム爆弾は、爆発はしないが、宮地教授がすわったが最後、2度と立上れぬ打撃を与えるというわけである。

もっとも、口だけは勇しいが、滅多に実行したことがないのが、我々2人の特質である。おまけに言ったことをすぐ忘れてしまって、しばらくすると全く別のことを言い出したりして、“節操”のないことおびたしい。大学3年生で初めて顔を合わせて以来約30年、我々が話し合ったことをすべて実行していたら、今ごろ生態学はすることがなくなっていたはずだし、日本の革命も完成していたにちがいない。

それから2～3年たち、副会長であることもおおかた忘れていたころ、水原会長から「要請第1号」が突然舞いこんできた。当時、彼に意中の人ができただのであるが、何とその相手に婚約者がいたのである。ふつうならめきめるところだが、とにかくO A Sの会長である。そのくらいで閉口するような男ではない。

「というわけで、君に要請する。その婚約者を暗殺せよ。手段は問わない。」

何しろ、我がO A Sには、“内容のいかんを問わず、即時かつ無条件に遂行”せねばならぬ“鉄の規律”がある。少々道にはずれるとはいえ、これは何とかせざるまい、と私は考えた。といっても、“暗殺”となると、さすがの私にも経験はない。仕様がなから、とりあえずアガサ・クリステイーの推理小説を数冊買いこんで、暗殺法の研究をはじめることにした。それまで推理小説は読んだことがなかったのだが、読んでみるとこれが結構面白いのである。要請も忘れて読みふけているうちに、会長が次の手紙をよこして、指令を解除してきた。彼は、平和的手段で婚約者を退け、意中の人を獲得したのである。やれやれ。

「在郷軍人会」はまだ解散していないはずである。そのうち、副会長から会長へ、とんでもない「要請」を送ってやろうと考えている。

<< 編集者への手紙 >>

日本生物学会誌5部入りの厚い封筒とどきました。近頃では、他の学会誌は少々超過するとすぐ別刷代を請求するので、今にもカワセ用紙の入った請求書が来るかとビクついているが、ただしこちらから要求したわけでないから、押し売りでもあるまいと安心している。

次に、あの文の中に、女と馬といっしょにして富家君から怒られないか、との会長の言に對しまして、一言弁解させてもらいます。もちろん、私の書き方が不充分だったので、そのように思われても仕方がないと一応謝りますが、私の真意は、女——從軍看護婦、馬——軍馬と、どちらも軍隊にはあるが、丁種はそれよりも軍隊に無関係で、丁種對女、丁種對馬と對比したつもの書き方があのようになったので、女と馬との合体ではないことを釈明します。

次は、大学時代が主役になる予定です。ではまた。

不名誉教授

<<< 編集局だよりの >>

局長：今度の「アナクシマンドロス」、何とかしまいまで読み通しましたよ。すごいでしょ。

会長：編集局長が投稿原稿読んだ言うて、威張ることないやろ。

局長：そう言われたらそうですけど、ほくにしたら大変な努力したんですよ。今度のは長かったし。

会長：それでどうやった、解ったか？

局長：いやあ、何かもうひとつ、ピンと来ないんですけどね。でも、今度のは前のより、ところどころ面白かったですよ。学者の悪口、書いてはったりしてね。

会長：筆がすべったんやろう。すべったとこだけ喜こんでたら困るね。

局長：ところで、会長、622ページのところに、「学門研究が健康であるための4つの要件」というのが出てますね。1) 研究はヒマでするもの、2) 権力や財力と結ばない、3) アソビでするもの、4) 何でもうたぐる。学門研究って、こんなことでええんですか？

会長：ええんですかって…… アカンのか？

局長：権力や財力と結ばない、とか、先生をうたぐる、とかいうのは、まあいいですけど、ヒマとアソビでするというのはどうも……

会 長：そんなら、何でやったらええねん。

局 長：やっぱり、大学の先生やったら給料もらってるんですから、そうですね、何というか、まあ仕事としてせんといかんのとちやいますか。

会 長：給料出してるのは政府という権力やろ。その政府を支えてるのは税金という財力やろ。給料もろて熱心に仕事したら、権力や財力と結ぶことになるやないか。

局 長：……何かおかしいなあ。大学には「研究の自由」があるから、別に政府の言うこときかんでも、好きなことできるのやないですか。

会 長：それがな、給料もろてるから熱心に研究“せなあかん”と思ったとたんに、「自由」がなくなるんや。ヒマやなあ、何かオモロイことないやろか、といつも思てんと、自由な研究はてきんのや。

局 長：まあ、会長見てたら、そうかなと思いますけどね。でも、何か給料ただ取りしてるみたいやなあ。そんな人少ないでしょう。

会 長：オレかて、それほど遊んでるわけではない。もともと、大学の先生になったが最後、健康な学問研究なんて、初めからでけへんのや。

(その2)

局 長：会長の論文が、こともあろうに“日本生態学会誌”に出たそうですね。「日本生物学会誌」というものがありながら、これは背信行為ですよ。

会 長：「生物学会誌」の方へ出せ、いうことか？

局 長：そうですね。会長がよそへ浮気したら、会員はだれも出さなくなりますよ。

会 長：これまでかて、みんなあんまり出してないやないか。

局 長：それは、まあ、そうですね。

会 長：ご要望とあれば出してもええけど、あの論文は「生物学会誌」に出したとすれば、20ページにはなるで。実は、昨年書いてたら止まらんようになって、14編できてるんや。1号に2編ずつ入れるとして、7号分は占拠できるな。会費、値上げするか。

局 長：そんなたくさん書いたんですか！ 困ったものやなあ。やっぱり“執筆意欲中枢マヒ物質”が要りますね。

会 長：そやから、あんまり面白くない科学論文みたいなもんは、よその学会の金使うて出したらいんや。

局 長：それにしても、よく会長の“科学論文”を、生態学会ともあろうものが、よく受けつけましたね。何も文句つけてこなかったですか。

会 長：生態学会には、わが学会とちごうてレフエリーちゅうのがおってな。

局 長：何ですか、そのレフエリーちゅうのは。

会 長：投稿された原稿を調べて、注文つける係や。

局長：カッコいいですね。うちもやりましょうよ。何かすごいこと言うてくるんですか？

会長：そやな、何ページ何行目の「しかし」はいらんのとちやうか、とか、1900時よりも19:00時の方がええ、とか。

局長：そんなこと、どっちでもいいことじゃないですか。会長の論文の「まえがき」のところに「本来平和なカエルの世界に“戦略”などという物騒なものを持ちこむ研究者が現われた」とか、「本研究は科学研究費を受けずにおこなった」とか、科学論文にあるまじきことが書かれていますけど、あれにも文句がついたのでしょう。

会長：いや、何も言うてこなんだよ。まあ、もし君がそんな事書いたら、コテンパンに怒られるやろなあ。

局長：会長やったらどうして怒られへんのですか？

会長：それは“人徳”というところやなあ。(局長、ガックリ)しかし、いやしくもレフェリーするんやったら、相手によって基準を変えたらいかん。うるさい奴には手かけんするなんて精神やったら、初めからせん方がええ。

局長：わが学会では手かけんせんとやりましょうよ。

会長：そうやな、まず手はじめに、君、「アナクシマンドロス」のレフェリーしてみんか。手かけんせんと。

局長：……………やっぱり、レフェリーはやめときますか。

!?! 会計報告 !?!

1983年4月 - 1984年3月

収 入

1000円会員	55人	5,500円
1000円会員	90人	90,000円
2000円会員	14人	28,000円
小計		123,500円
昨年度くりこし		61,700円
総計		185,200円

支 出

上質紙	14000枚×2円	28,000円
表紙	1500枚×3円	4,500円
ファクス原紙	60枚×70円	4,200円
印刷インキ	3本×900円	2,700円
送料 15、16、17号 その他		99,000円
封筒	1000枚×4.2円	4,200円
総計		142,600円

差引次年度くりこし

42,600円

監査報告

相当怪しげやけど、まあ黒字やから、よろしいやろ。そやけど、こんな学会に会費払う人がよ
うけおると、毎会感心しますなあ。

日本生物学会会計監査 夢籍 忍太郎 印

日本生物学会誌 第18号 1984年5月15日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載